

弔 辞

忽然として、ご逝去なされました浅原義雄先生のご霊前に、ここに、謹んで告別のことを申し上げます。

浅原先生

先生のあまりに早い訃報に接し、今、私たち跡見学園女子大学の教職員・学生一同は、言葉には言い尽くせない、深い悲しみに襲われております。

省みますれば、先生は、一九六七年の三月に、早稲田大学のフランス文学専攻を卒業されております。全くの偶然ですが、そのころ、私も同じ学園の他学部で学んでおりました。マンモス大学のこと、学部も学年も違えば、もとより知るよしもない関係ではありますが、あの騒然とした特有の時代に、物静かな先生が、あのキャンパスにおられたのかと思うと、何か不思議な気が致します。

先生はまた、一九六八年四月から一九七三年の三月まで、早稲田大学大学院の文学研究科のフランス文学専攻の修士課程で学ばれました。そして、修士の学位をとられた後、一九七五年には、今度は、期されるころあつて立正大学大学院の、英文学専攻の博士課程に進まれ、そこで一九七九年三月まで、研鑽を積まれたと伺っております。

その間すでに博士課程在学中に、東海大学の助手を勤められ、一九八〇年四月からは東海大学でフランス語担当の専任講師として、早くも大学の職に就かれたわけでした。

そして、その二年後の一九八二年の四月には、跡見学園女子短期大学に、フランス語と英語の両方を担当される専任講師としてお見えになり、跡見の教員としてのスタートを切られたのでした。

それ以後、短大で助教授・教授と進まれ、二〇〇七年の四月、跡見学園女子大学の文学部人文学科に、比較文学とフランス語を担当する教授として迎えられるわけでした。

短期大学在職中は、学生部長、入試・広報部長、さらには図書館長と、次々と要職・激務をこなしてこられたと、伺っております。

大学文学部に移られてからも、なかなか引き受け手が見つからないような仕事を、嫌な顔一つせずに、にこやかに引き受けしていただけたばかりか、いつも、周囲の同僚教員が、なごやかな気分で仕事が出るように気配りをなされ、業務を遂行されていたお姿には、頭のたれる思いでございました。

浅原先生、先生はいつも、そのにこやかなご表情で、職員にも学生にも接しておられたということも伺っております。

訃報を耳にした後、ある職員は、「先生は、他の方が拒まれた仕事を、《ええ、私でよければ、喜んで引き受けますよ》と、笑顔で引き受けてくれたんです、あの時は本当に助かりました」と語っていました。

一方、ご研究にあつては、フランス文学と英文学の双方に長じておられ、いくつもの作品研究を、こつこつと丹念にご研究されておられました。

最近ではキリシタン文学や翻訳論の成果を踏まえての授業で、学生を魅了していたとも伺っております。

先生がご病床に臥され、その授業をなさることが出来なくなつてからも、責任感の強い先生は、「申し訳ありません、次の学期には必ず致しますから」と語つておられたのですが、それは、まだほんの数ヶ月前のことでした。

先生、先生には、なんとしてもお元氣になられて、教壇に戻られてほしかったです。文学部の教員一同が、それを強く願つておりました。

私事を申せば、キリシタン文学について、先生と語りたかったです。

ですので、こんなにも早く、お別れの日が来ようとは……。

ほんとうに言葉が御座いません。

しかし、先生、いつまでも悲しんでばかりいれば、先生のにこやかなご表情が歪まれてしまうと存じます。もはや彼岸の世界に移られた先生は、たぶん、彼方から、私たちを、あのにこやかなご表情で見てくださっているのだと思います。

そして、ご遺族の皆様方にも、もう、いつもの笑顔で語りかけてくださっているのだと思います。

浅原義雄先生、

どうか、彼方の世界から、ご遺族の方がたを、

そして私ども跡見学園女子大学の教職員・学生を、その温かい笑顔で、いつまでも見守ってください。

私たち、跡見学園女子大学文学部教員一同は、ご誠実で、周囲をなごませる先生の、あの笑顔を、ともに宝として、なごやかな人間関係を築きながら、学園の前進のために努力することを誓いたいと思います。

ここに、改めて心より哀惜の意を表し、惜別の言葉といたします。

二〇一一年九月五日

跡見学園女子大学

文学部長 奈倉哲三